

開拓農場主として

佐賀県 小川 逸 次

明治四十二年十月、有明町に生まれ、昭和二年三月、県立佐賀農学校を卒業し満州の農業開拓を志して同年四月に渡満し、奉天（弦審陽市）の大星ホテルの農場で一時期働く。満州の公主嶺国立農業試験場に農業講習所が併設されるのを待って翌年四月入所し三か年、満州農業と中国語の研修をした。満鉄地方部の指導、助成を得て、鉄嶺市に開拓農場を開設し、野菜畑作、水田畜産（乳牛、豚、鶏）等の経営を始めました。順調に事業も進展してきましたので昭和七年結婚した。農場も個別経営に分割し、事業もいよいよ発展し、一男一女の子どもに恵まれはりきっていたときに、柳条溝事件、日支事変発生し、ますます拡大し、昭和十六年七月関東特別大演習の名目で満州第二六四三部隊に召集され、各地に転戦し、奉天防衛司令部に勤務中、八月十五日終戦の放送の直後、武装解

除され、北方に移動を命ぜられた。鉄嶺の妻子を呼び、移動や疎開があっても、鉄嶺の農協から離れないように一といいきかせ、私が必要として迎えにくるからと奉天の知人宅に一時避難させた。夕方北方に移動出発（行先不明）をはじめたので、満州現地召集の三人で特別に隊長に願い、道中数回満人に尋問され、非常に危険な思いをした。農場ではあんがいと平穏で、異常なく、使用中の満人に依頼して客馬車を仕立て（列車不通）奉天の友人宅にいる妻子を迎えに行く。奉天に正午頃着き、急ぎ準備してさっそく客馬車に乗ったが、奉天と鉄嶺の間で部落民に襲われ、所持品や衣服もいっさい盗られ、丸裸同然にされたうえ、叩かれ、半死半生の姿で（家族のため抵抗できず）ようやく夜中に鉄嶺にもどることができた。世情はしだいに騒然となり、銃声も激しく、日夜不安を感じていたが、国民軍より生産農場として接収保護され、ついで共産軍よりも保護され、一部生産等をつづけていたが、（給料月三千五百円を一回貰う）ソ連軍の進駐により、毎日の如くクバイクバイでいっさいの生産作業は中止、荒れ放題となるし、ますます不安を感じ

た。その間、北方より避難者や疎開者が一時宿をとや
てきて、一時は、三十数人も寄宿し、農場の残り農産物
を食べ、また南下した。疎開するよう民団をすすめられ
たが、農場を離れなかったのがさいわいした。その間、
八路军とソ連軍によって、元警察官や憲兵、市の有力者
が十数人連行され、行方知れず。うち数人は鉄嶺の河原
で銃殺され、死体の引取りに涙したことも幾度か。私も
また保安隊に農地の地権書や拳銃、日本刀を持って出頭
せよと呼び出され、きびしく尋問のときには生きた気は
なかったが、幸い使用満人の助言釈明があつて、ようや
く解散されて助かった。また引揚げ直前になって、農業
技術者として指導のため残留するようにといわれたが、
引揚げの責任者であり、病人も数人いるし郷里の老父母
に一度会わせてくれて懇願し、了解してくれ、ようやく
引揚げの時間に間に合つて冷や汗が止まったことなど今
なお悪夢のような感がする。

またマラリア、チフス等の病気で死亡した不幸の人は
数知れず。翌年六月内地に引揚げることになり、現金一
人二千円と所持品の僅かをリュックに背負い、病身の子

どもや女性を介抱しながらコロ島經由郷里に引揚げること
ができたが、弟の子ども（四歳）と姪が道中で死亡、
道路の近くに埋葬した。郷里に帰って一週間目に甥と甥
の子ども三歳が死亡。

三十八度線川渡りの脱出

北海道 佐々木 春人

昭和十年五月帯広の自動車会社を退職して同僚とともに
に渡満し、大連の自動車会社に入社した。新京・吉林と
転動し、昭和十二年五月退社して、吉林市内にて自動車
修理工場を開設し、ここで妻帯し三人の子に恵まれ、順
調に営業し幸せな生活をしていたとき、再度の臨時召集
を受けた。それまで教育召集で一か月、第二次ノモンハ
ン事変で一か月半、三回目が八月一日入隊は新京自動車
第一連隊で十五日目で終った。軍隊は厳しいというより
恐ろしい所だった。終戦になってはっとした。吉林にい
たとき、近所の満州人古老は皇軍と言われたのは日露戦